

# 支援を問う

—もう一度襟を正して—



## 【支援物資再考】

陸前高田での学校支援は徐々に収束に向かいつつあります。というのは、必要物資が学校に整いつつあるのです。私たち支援隊による理科室復旧の支援も、後1回の物資提供を行えば、大きな支障なく理科の授業が行えるところまでできました。企画を立ち上げてからおよそ1ヶ月強という時間をかけての支援活動で、それは「少なすぎず、多すぎず」をモットーとしてきた結果として必要な時間でした。もちろん、そのモットーが本当に実現したのかについては、もう少し時間が経過した後に振り返ってみる必要があると思っています。

なぜ、そのようなことを思ったのかといいますと、今回、小友小中学校で私たち支援隊が目にしたのが、学校では必要がないと思われる支援物資で理科準備室が一杯になり、私たちが運んだ理科備品と渾然一体となっている状況だったからです。小友中学校の副校長先生の話によれば、宅配便の復旧とともに、誰ということなく支援物資がどんどん送られるようになり、その整理までは手が回らないということでした。ざっと見ただけでも、学校で使える物もあれば使えない物もあり、加えて、小友中学校は小規模校なので、職員数も少ないとなれば、当然、その整理まで手が回らないということになることは簡単に理解できました。さらに、小中が一つの校舎で授業をしているということであれば使える教室にも限りがあります。これらの結果として、理科準備室は支援物資の山になっていたわけです。

この状況に対して、私たち支援隊は、支援物資の整理と不必要な物資の持ち帰り支援を行うこととしました。様々な大きさの衣装ケースや段ボール箱、鞆の中に入っていたのは、食器や調理器具、大人物の衣料品や鞆などでした。持ち帰るためにそれらを支援隊の車一杯に積み込む作業は、同じ「支援者」として何となくむなしさを感じるものでした。中には、「これは使えるのでは？」と思った品がいくつかありました。例えば新品のフラットファイルが100枚。しかし、通常の物より厚さが2倍ほどあるタイプで使いにくい物であるとのことでした。また、30足あまりの体育館履きや運動靴。とても綺麗に洗ってあることは分かりましたが、名前入りでタイプもバラバラでした。これらは、もしかすると被災直後には必要だったかも知れませんが、しかし学校に物資が整い始めた今となると、必要なものではなくはなっているのです。「本当に必要なもの」「本当に必要な時期」を見極める配慮が、以前にも増して支援する側に求められているのだと感じました。

## 【すたんどばいみーによる支援】

少し前から、陸前高田のモビリア避難所の人々が同施設の敷地内に建てられた仮設住宅へ入居する、という話を聞いていました。すたんどばいみーの支援メンバーの中でも、「今回、避難所に子ども達はいるのだろうか、仮設住宅に入ったのだろうか、モビリア



避難所以外の子ども達もいるのではないかと、何がどんな風になっているのだろうか」など、今回は色々な想像をしながらの現地到着でした。避難所の責任者のお話で仮設住宅への入居が始まっていると分かり、今回の最初の取り組みは、今まで関わってきた子ども達が今どこにいるのか、仮設住宅のどの部屋にいるのかを把握しながら子ども達を呼び集めることでした。モビリア避難所の子ども達は、避難所から仮設住宅に移った子どももいれば、自宅の修繕がほぼ終わったのにあわせ自宅に戻ったりしていました。また、新しく顔を見せた子は、身を寄せていた近くの親戚の家からこの仮設住宅に移ってきたということでした。

子ども達は、すたんどばいみーのメンバーを見つけるとすぐ寄ってきて遊び始めました。今回は学習の核になっていた子が、部活の大会の応援のために不在で、なかなか勉強にはなりませんでしたが、みんなでゼリーを作ったり鬼ごっこをしたりと、その光景は一見今までと変わらないように見えました。しかし、子ども達の日常は、支援を始めた当初とは確実に変わってきています。学校が始まっただけでなく、部活や大会など学校の取り組みが徐々に行われるようになって、少しずつ取り戻されつつある学校の日常に参加出来るようになったこと。避難所から自宅へ、避難所や別の場所から仮設住宅への転居を経て、住む場所、寝食をともにする人々が変わってきたこと。「避難所でのみんなとの生活」から「個々の家族の生活」への変化が、子ども達の中でどのように感じ取られているかはまだ分かりませんが、すたんどばいみーのスタッフの間では、これまでと同じ支援でよいのかどうかと考え始めているようです。

モビリア避難所は、近いうちの閉鎖が決まっているそうです。それにかわって、モビリアキャンプ場に建設中の仮設住宅に地区外の人々が入居することになり、最終的には全体として500～600人ぐらいの規模の集落になるだろうということでした。そこには今までとは違うコミュニティが生まれ、このことが子ども達にどんな影響を及ぼしていくかはまだ未知数です。コミュニティの変化と子どもの変化を注視しつつ、必要な支援を探る試みは今後も続きます。

## 【支援の模索】

万石浦中学校避難所での学習支援の難しさについては、前回も、前々回も報告しました。そのような中で、①土日のみの支援活動であること、②支援者を固定できないこと、この2つの条件のもとでの「難しさ」を乗り越え、意味ある支援活動への模索が始まりました。

支援隊は、子どもたちの「荒れ」について、現在のところ、次の2つの状況から導き出されていると分析しています。ひとつは、子どもたちの家族、特に親たちが安定した生活環境になく、そのため、子どもたちへのまなざしにも一貫性がないことから、同じことをしても、怒られる時もあれば、怒られない時もあり、子どもたちは、その中で、その場その場を生き抜くことに精一杯であるということでした。それは避難所で子どもた

ちのかかわる大人たちにも当てはまることです。

そうした一貫性のないまなざしに拍車をかけているのが、「支援」という名のイベントです。これがもう一つの原因ではないかと考えられます。子どもたちが辛い状況にあることを何らかの形で聞きつけて、「支援」に入ってくる人々の活動は、どうしても、子どもの要求を中心に組み立てられることになり、それらが繰り返される中で、子どもたちの要求は膨張しつつあるということです。もちろん、例外に漏れず、私たちの支援も、これまでそれに近い状態にあったと思います。だからこそ、子どもたちは昨日の遊びに飽きたらず、今日はもっと過激になるということが、ここ1ヶ月繰り返され、「荒れ」は酷くなってきているのではないかと考えられました。

これらの分析をもとに、今回からは、毎週末の支援に、ひとつの軸を入れる取り組みを始めてみました。それが「夏休みに修学旅行に行こう」という企画です。教室の中で行われる子どもたちと私たちの活動を、すべて修学旅行に結びつけることで、散発的な子どもの要求に、若干なりともある方向性を持たせていくこと、また、支援に入る大人たちの立場も、バラバラな個人の集まりではなく、ひとつの方向に向かう大人たちの集団としての安定性を確保していこうという試みです。そして、その軸のまわりを子どもは出たり入ったりしながらも、集団の活動と自分の要求を睨みながら、自分を表現する手法を学ぶこと、そんなことを、この今の子どもたちに学んでもらえれば、かれらの表現の方法も変わるのではないかと考えました。

そんなわけで、今週末は、行く場所を考えるための材料として、日本地図のパズルや、白地図、「修学旅行に行こう」という看板を作成するための材料、修学旅行先で作る料理の事前練習の用具などを持ち込んでの支援となりました。

今週は「導入」でしたが、写真のように、日本地図のパズルに興味を示した子どもが、集中力抜群にパズルを入れ込むような姿も見られました。また、「修学旅行に行こう」のパネルに貼るアイロンビーズに夢中で取り組み、落ち着いた時間が、活動の最初だけでなく、途中でも、後半にも見られました。もちろん、支援隊の方針が明確になったからといって、子どもたちがそう簡単に変わるわけではありませんし、私たちの変化に気がつき、目を向けてもらえないことをひがんで「ふくれっ面」を繰り返す子どももいました。手を変え品を変えることそのものは変わらないのですが、それでも変えられる手や品が、何かひとつの方向（修学旅行に行くこと）に向かうことは、時間がかかりつつも、子どもたちを「荒れ」とは違う方向に導くのではないかと考えているところです。

来週あたりは、行く場所が決まるような活動になるでしょうか。「支援」の模索は、これからも続きます。

### 【今後の支援の予定】 6月21日現在

- 6月25日（土）～6月26日（日）の第13回支援（4部隊構成）  
土：小友・広田中の支援物資運搬  
モビリア避難所の子ども学習支援（すたんどばいみー）



万石浦中学校避難所子ども学習支援

日：モビリア避難所子ども支援（すたんどばいみー）

万石浦中学避難所学習支援

### 【ご協力いただきたいこと】

1. ご提供いただきたい物資

※夏の季節に向かって必要と思われる物品の提供をご提案ください。

2. 同行していただける方 ※参加可能な週末をお知らせください。

### 【ご協力に感謝!!】

■ 今回の支援隊のメンバー（21人） 柿本隆夫（引地台中学校）、荻谷夏子、家上幸子（Ed.ベンチャー事務局長）、清水睦美（東京理科大学）、家上幹雄（会社員）松永雅文（大和市特別支援教室）、福島良彦（引地台中学校）、清水寛（屋代高校）、黒木啓之（合同会社がんぼろう）、佐藤達也（大和中学校）、山田哲也（一橋大学）、大和亨（会社員）、鏑城啓（東京理科大学）、村田仁美（和光大学生）  
すたんどばいみー：チューブサラーン・劉麗鳳・伊藤瑞姫・グエンファムホンクアン  
今井美里・佐藤岳也・大林沙紀（東京理科大学）

■ 小友小中学校 ①支援物資の提供：理科備品、音楽CD

②支援物資仕分け作業（4人、1.5時間）

■ 広田小中学校

支援物資の提供：理科備品、技術教材、メモ帳、歯ブラシ

提供理科備品リスト：電源装置、直流電流計、直流電圧計、導線、マグネシウムリボン、エナメル線、シャーレ、はく検電器、導線、ビニールコード、実験用鏡

■ モビリア避難所 すたんどばいみーの子ども学習支援（5人、2日間のべ7時間）

■ 三上教材社（教材業者） 技術科教材；小友中分支払い、広田中分の検討

■ 万石浦中学校避難所 子ども学習支援（14人、土・日、のべ14時間）

■ ご協力いただいたみなさま（敬称略、順不同、物資・寄付を含む）6/10～6/17

協同組合やまと商業活性化センター「とれたて大和」・「あっとボックス」  
引地台中学校理科教室（中村孝夫、稲辺昌弘、福島良彦、山本健太郎）、内藤材木店  
有本真紀（立教大学）、笹本雪子（引地台中学校）、河村匡祐（大和中学校）、堀健志（東京理科大学）、工藤美知子（大和中学校）、藤田武志（日本女子大学）、小西永里子（大和市国際化協会）、小林西子（東京理科大学）、清水麻美（中条高校）

今後の継続的な支援の活動のために広く寄付を募っております。

横浜銀行 中央林間支店 普通6018180

Ed.ベンチャー東日本大震災支援（エドベンチャーヒガシニホンダイシンサイシエン）

NPO法人教育支援グループ Ed.ベンチャー

〒242-0007 大和市中央林間 3-16-12-107

Tel/Fax:046-272-8980 e-mail: toiwase@edventure.jp

